

思い出 我が青春の一作

てづくりのいえ

神奈川県医師会理事 羽鳥 裕

建築は技術と芸術の総合力である。理工学部建築学科卒業にあたり同窓2人と徹底して物作りにこだわってみようと考えた。家内となる人も建築科であり、自分の家をつくりで造ることを企画した。すでに医学の道へ転身するときめていたが、当時は学士入学の制度もなく、教養課程再履修だったが、語学以外はフリーパスでよいことになり時間はできた。まず、建築事務所のバイトでおてのものとなったバルサと角材で1/50の柱梁の建築模型作りをはじめた。構想はこうである。柱にあわせ梁を両側から挟んで、ボルトで締めて固定、高さ6メートルの杉材の柱を14本、7本づつ2列の柱に大屋根をかぶせ、大きな吹き抜けとスキップフロアの組み合わせで、約120m²の建築面積である。最上階には、南北に8枚で16枚の回転窓のアメリカ西海岸の建築群のイメージである。模型作り、エスキース、詳細図面を経て確認申請を取り、建築工事のための種々の道具、機械など伝をたどって借りに行く。建設予定の現住の保土ヶ谷の庭先には、崖を支える笹竹の密生で太い根をスコップで切ることもままならず基礎工事の穴を掘るのも難渋した。布基礎の鉄筋コンクリートだけでは崖そのものが崩れるおそれがあるので、長さ2メートルのコンクリートパイルを高い足場を組み、ジュリア戦記シーザーのゲルマニア攻略ライン川渡河作戦の橋桁作りのように鉄材の重しで落とし込む。レベルを使って水平基準線を定め、基礎を造るにはコンパネのベニヤ板で木枠を作り

基礎底部にワリグリを入れフーチングと呼ばれる布基礎を回すがL字型やJ字型に曲げ史乃で鉄筋を固定、コンクリートを流し込んでもふくれないように両側からボルトナットで挟み、床梁のためにアンカーボルトの頭を出す。

そして生コンクリートを手配して流し込んで鉄筋コンクリートとするわけだが、崖上のため直接生コン車のノズルから流し込むわけにはいかない。そこでやや離れたところにある車庫の入り口に生コンを2.5平方メートルの鉄板の上に仮置きし、これを人海作戦で一輪車に積んで基礎へ流し込む。

梅雨明けの暑い日であった。この日に備えて、建築の多数の友人に朝早く駆けつけてもらい作業の説明が終わるまもなく生コン車が到着し、生コン屋の兄ちゃんは、ザザザーと生コンのおおきな山を一瞬で築き帰ってしまった。そしてわれわれは一輪車でソフトクリーム状のものを寸暇を惜しんで流し込む作業がつづいた。

ここで事件が起きた。

手配の生コン車が早く到着したため作業の体制が整っていなかったのと、暑さのためか我々の疲労もはやく積み出すペースが次第に落ちた。皆、口には出さぬが、まずいかなと思っていた。案の定、銀閣寺の観音殿の向月台のような小山ができたままスコップで掬える状態ではなくなってきた。

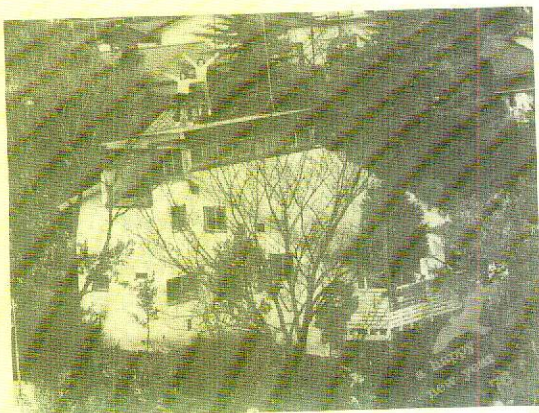
ここからは皆無言で、コンクリートをはつる作業が始まった。夜10時をすぎても終わ

らず、東京から手伝いに来たものも帰ると言い出せずに、巖となったガチガチのコンクリートの山を砕く作業が続いた。徹夜になって重い鉄のハンマーと鉄鍬ではつる作業が続く。今では有名になった後輩の建築家NもA新聞に“コンクリートの復讐”という題でこのときの思い出を語っている。

この後も、高さ6メートルの足場を組むために膨大な鉄パイプ用意したが、赤軍浅間山山荘事件直後の頃で、警察から疑われないか盗まれないか冷や冷やであった。これらの足場が完成したときは圧巻であった。電気ドリルでボルトの穴を開け、丸鋸で木を切り縦に割き、木を刻み、ノミで臍を切る。装は昭和初期の洋館解体の工事にも参加し、ムクの分厚い建具を玄関に、またシャンデリアをもらってきたりした。スレート波板の大屋根をかける、外壁を張る、杉材を天井壁面にかんなをかけずにラフに張る。しかし資格のこともあるので電気水道ガスなど設備工事などは任せざるを得ないところもあった。

危険な作業もあったが幸いなことに落下や大怪我をしたものもなく無事に終了とした。

最後までつきあってくれた建築家遠藤泰人、染谷哲行の両名には感謝の言葉もいづくせない。また、なれない作業の手伝いに来てくれた多数の横浜市大の同級生にも深謝する。



1976年賀状 南からの遠景

その後、ユーレルバスで約50日間、100万円の新婚旅行兼建築冒険旅行をおこなった。モスクワ、フランクフルト、ロマンチック街道、ウィーン、ベニス、フィレンツェ、ローマ、プリンディシ、アテネ、ミコノス、クレタ、バーゼル、ロンシャン、パリ、バルセロナ、トレド、グラナダをまわり解剖の始まる前日に帰国して僕の建築行脚は終わった。

住み始めても内装工事は続き、周りのうっそうとした庭から、開けはなっていた3階の回転窓から侵入したかアオダイショウが子供部屋の布団の真ん中で鎮座していたこともあった。この回転窓は重要な意匠でもあったが、台風など強風雨では漏水することもあった。当時は手作りブームもあったが、さすがに家を手作りすることは物珍しかったため10社ぐらいから取材があった。

その後、この家には約15年住みつづけたのだが、雨漏りのしないような機能的な家に住んでみたいという家内・子供の希望もあり、第二の家を造った。設計はしたが施工は棟梁と工務店であった。

そして、30年日でももなく終の棲家となる三つめの家ができる。



居間の吹き抜け 家内と。
竣工直後で、まだ雨漏りはありません。